

建礼門院右京大夫集より

—— 対資盛歌 俯瞰分析 ——

上 村 敦 之

まえがき

この集に収められる歌数は、すべて三百五十余首におよぶが、この小論は、筆者二十才代に知り、愛し、そして、あわただしく去っていった平家公達―平資盛への恋歌七十首ほどを対象として考究した。

全体を、序・破・急三編に分け、各編それぞれ、二十首〜三十首を対象とする。序は、恋情の芽生え、発展の過程、破は、恋の懊悩と恋人の死による破綻、急は、資盛死後半世紀を生き延びた筆者の若年の愛の日々の反芻、懐旧をそれぞれの領域とする。

引用歌および作歌番号は、岩波文庫版、久松・久保田阿氏校訂の「建礼門院右京大夫集」によった。

序

一 資盛への恋の芽生えのころ

61夕日うつる梢の色のしづるるに心もやがてかきくらすかな
十七才で、高倉帝の中宮徳子（後の建礼門院）に仕えはじめた

筆者が四・五年後、二十才過ぎたころ、平家の公達平資盛を知った。重盛の二男で、当時の官廷サロンでナンバーワンの存在だった彼は、筆をよくし、武勇に秀で、歌にも傑出した彼女より四才年下、当時、十七才の美青年だった。周知のごとく、彼女には、藤原隆信という親子ほど年上の恋人がいた。芸術諸分野にすぐれ、特に画家として一疏、名うての好色家でもあった彼との間もかなり密接だったようだが、資盛との愛は、ごく突発的で、しかも短期間に燃え上り、終生長く尾を曳くものとなった。

この歌は、隆信という恋のベテランに心を許しつつも、にわかには十七才の若年の貴公子と結ばれるに至った二十才余の一女房の深い恋の懊悩が託されている。実家で、日没前、庭の榎木を見るともなく見ている。夕陽の逆光が庭樹に注ぐ。そこへ、折から時雨が降りかかって、心も次第に落暗の闇へと沈んでいく。そこには、中年の隆信への執心と年少の資盛への感傷といった気持の混迷が反映されているように思える。

63. 露のある尾花が末を眺むればたぐふ涙ぞやがてこぼるる

茫然ともの思いにふける視野の中に^{すゑ}薄が映っていた。その裡末に露が宿っている。それを眺めていると、まるで野分の突風のようにならぬ自分を見舞った資盛の若い情熱……その不思議な因縁の糸のあやしさにわが身が引き比べられてつい涙もこぼれがちになる。運命の激変に対応しかねている年若い女房の現し身の遠慮が見事に描かれている。

68 とにかくに心を去らず思ふかなさてもと思へばさらにこそ思

へ

資盛は、叔母に当る建礼門院の所へ常時出入りしていた。女院に供奉する筆者は、人目を意識して何時もよそよしく振舞う男の態度を忍ばねばならなかった。時には、男の度を外したなれしさに動転したり、男も、筆者の抑制した応待に、陰で厭味をいうこともあろう。

かくして、四六時中、筆者は資盛のことを思い続けねばならなかった。こんなに苦しまねばならぬならいっそ、念頭より去ってしまおう、とあきらめながらその端から、更に深い執心へと気持はのめりこんでいく。人を愛することの重みを若い筆者は今、二律背反の深い亀裂に身をまかせつつ思い悩んでいるのだった。

77 住の江の岸をば人の心にてわれぞかひなき身をうらみぬる

典拠歌、紀貫之「道知らば採みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草」

更に、この歌は、資盛の「うらみてもかひしなければ住の江に生ふてふ草をたづねてぞみる」の返歌である。資盛は、冷たいあなたに對し、忘れ草により忘れようとしているのだ、と訴える。女の歌は、ややわかりにくいのが、忘れ草は私とは無縁で、私は、思いがいのないわが身を恨む、つまり冷たいのはあなただと逆に男をなじっている。

この頃には、同僚女房にも二人の仲は知れわたっていたらしく、この贈答歌の背景に、住吉に参詣した資盛が、土産の洲浜に忘れ草を添え彼女に進呈したとあるから、貫之歌の連想で、男は女にゆとりをもつて戯れ、女も、男の真情を疑おうとはせず、わが意を解せよと男に甘えているのであろう。いずれにしても、波瀾やかな住吉詣でに似た平安な充足された日々に移られた時期であった。

二、資盛への恋つもの

122 うつり香もおつる涙にすがれてかたみにすべき色だにもなし

しばらく資盛の足が遠のいていた頃か。恋しい人の移り香のしみつく枕、その香も冷たいあの人を慕って落ちる涙に消えがち、一夜泣き通しに眠ったのか、枕のおおいのきれいな模様も涙のた

めほとんど色あせてしまっていた。

「うつり香・かたみ」と同類の語を使い、「香・色」の感覚表現、「……も、……だに」の抑揚表現など、表現技巧もさえ、遠のく恋人への執心が見事に浮彫されている。暗い憂愁のトーンが目立つが、底に筆者の甘美な哀訴が漂っているように思われる。

121 見るままに雲は暗れゆく月影も心にかかる人ゆえになほ

訪れ来ぬ恋人のことを、とこう思い悩んで縁側に坐っていた。

一瞬、濃雲が暗れ、月が顔を出したと思った。しかし、その月光も雲間からわずかに洩れるのみで、あの人への懊悩から逃れられない私の心の闇を照してはくれない。上の句の、叙景の雲の退散の律動感、下の句の、常時、心にかかる人ゆえに、月影も(雲に)かかるとの重層感も心憎い。最後の「なほ」は、やや流動感を阻むが、恋情の発露が充足されない心の残響として把握されてよいであろう。

119 つねよりも面影に立つ夕べかな今やかぎりと思ひなるにも

120 ・よしさらばさてやまばやと思ふより心弱さのまたまさる

かな

同巧同系の作といってよからう。前者、もう、逢うを限りしたいと思いつつも、そうした諦観の夕べにあの人の恋しいイメージが一段と鮮明に残照に浮ぶという。後者、もういい、これであ

の人との現世でのえにしが切れるのだから、とひそかに決心する。だが、その時点から、自分の決意はくずれはじめ再度の逢う願へと思いはつる……。

前者、「常よりも……夕べかな。(漸層法)」「今やかぎり」と……にも。(限定法)」。この一見矛盾した修辭法の融合が、恋人の残像を永遠に追う女人の悲哀を見事に描写しえている。又、後者の、「よし……さらば……さて……やまばや」の重層的シラブルは、深まりいく恋の諦念を説得力をもって描き切っているし、下の句の「……より、心弱さのまたまさるかな」の「……より……また」の対が、理性・感性の反発・超克を心憎く表現している。二首いずれも、表面的な諦念の裏にひそむ資盛への断ちがたい煩悩・慕情を深切に汲みとるべきであろう。

114 年月のつもりはててもそのをりの雪のあしたはなほぞ恋しき
このころ、筆者二十三才、知り合って四年目ぐらいだろうか。

この年(治承三年か)、重盛没、畠山川の合戦あり、母夕霧没、そして、恋人資盛は、伊賀へ出陣している。しかも、翌年の、以仁王敗死、福原遷都、頼朝・義仲挙兵……へと、平氏全盛の世は音を立てて崩れていく無気味な胎動があった。

その年の冬、降り積る雪の庭景色をながめやっていた筆者の所へ、恋人は突然訪れる。くつろいだ普段者の右京大夫に對し、男は「かれ野(色)、蘇芳(色)、紫」の狩衣・指貫のいでたちで

現れる。平家きつての、文武に秀でた美青年公卿の、雪中一幅の絵に似た優雅な姿態である。筆者の想いは、拾遺集の古歌「山里は雪よりつみて道もなし、今日來む人をあはれとは見む」に通じた。

久方の訪れ、しかも、このころ、西山善峰寺の兄の所にいた筆者にとって、積雪をおかしての恋人の來訪は、世情混沌の足音も間近だった頃だけに、全身ふるえおのくような喜悅、更に古歌の感慨も輻輳して、終生忘れえぬ心象風景になったにちがいない。

破

一、資盛へその後の思ひ

168 あはれにもつらくも物ぞ思はるるのがれざりけるよの契りに

治承四年、いよいよ世情は驟然としてきた。十二月には重衡の南都焼打ちの大量動員もあり、一門の武者いずれも臨戦体制にあった。一方、女は、西山の片田舎で埋もれた別世界に生きている。たまさかの逢ふ瀬は、資盛にも右京大夫にも現身を離れた忘我の一刻だったにちがいない。

前世よりの定められた宿世に生きる男女の深い契り、それは魂をゆする感慨でもあり、一面、のがれがたい契りゆえ（いつか裂かれる身と）むごく、悲しくも思われるのである。男女の宿縁の

歎染と哀情を深く捉ええたモノローグといえよう。

169 山里は玉まく蕨のうらみにて小笹が原に秋のはつ風

作者の住む西山の叙景―蕨が露を、玉をはらうようにまき、その葉は風で裏返りがち、小笹の生い茂る原に初秋の風が吹く。それに筆者の心象をグブラス。あの人の訪れは遠のき、怨訴の気持で、涙は玉のごとくしたり落ちる。あの人は早くも私に厭いだのか、笹原には空しく秋風のみ吹き渡る……。部屋にこもり、ひたすら恋人の訪れを待つ作者の想念が初秋の風物に見事に形象された秀歌といえる。

170 おもかげを心にこめて眺むればしのびがたくも澄める月かな
月明の宵、戦塵を駆けるあの人、西山の私の庵室に向うかの人と心乱れて物想いに耽っていた。やがて月は皓皓と澄みわたったが、その消澄の月光を見る中に私の心は抑えがたく涙あふれるにまかせた。資盛への切迫した慕情溢れる佳作といえよう。

173 あくがるる心は人にそひぬらむ身のうさのみぞやる方もなき
私の身体から遊離し、私の意を離れてその人の運命をいとおしむ心は、資盛様に付着したのであろう。しかも、恋しい人に愛されつつも、逢瀬も抱擁も遠のいた今のわが身の凝愁：これのみは暗らしようもない。「人・身」の対語、「あくがる・そふ・うさ

・やる方なし」の心象の疊語的表現、宮廷歌人として手なれた修辭を思わせ、不充足の恋の苦惱は、よむ人を強く打つ迫力を持っている。

196 なにとなきことの葉ごとに耳とめて恨みしことも忘れぬかな

少し前、資盛様と親しく語り合っていて、大して深い意味のあることではないが、一寸したことを聞きとがめられて私を叱責されたことがある。あの人のやや上気した、恨みがましい顔つき、声音：それが今なつかしく思い出される。悪い予兆として現われねばよいが：筆者の乙女心は甘酸っぱさを秘めて戦慄している。

二、悲報来る

222 なべて世のはかなきことを悲しとはかかる夢みぬ人やいひけむ

元暦二年（文治元年）、平家、壇の浦で滅亡。・建礼門院入水：助命（この年、大原寂光院入宅）・安德帝死亡・宗盛ら捕虜・そして資盛入水。

現世のはかなき、男女の宿縁のはかなき、それを総じて、一律に悲しいと評するのは、自分の恋しい人のいたましい最期を夢枕に見たことのない人の言葉であらうか。歌中の「夢」は上記のように、実際の夢にも取れるが、相思の男女の壮大な恋愛ドラマの

意に取れなくもない。後者の意に取れば、世間の人の視聽を超えた愛の消息を臆せずに交し得た男女の恋愛賛歌となり、そうしたブライドに満ちた体験を踏まえつつも、夢破れた時の悲惨さの哀訴になり、恋人の訃報に接しての詠歌としてその心境を如実に物語るものになろう。

228 悲しさのいとど催はす水茎の跡はなかなか消えねとぞ思ふ
都落ち直前、資盛はひそかに彼女にしのび会い、生前の不義理を謝しつつも（逢瀬の僅少、正夫人との結婚など）、数年の自分との嘉みに免じて、死後の回向を頼むという。

彼女は、彼の言を承けて、一人ひそかに法要を行なう。生前の男よりの恋文で、料紙や打紙を作り、それに導師に頼んで色々と供養の詞句を書いてもらう。ところが、それらの紙は裏より故人の筆跡が透いて見えるのである。表の（実は裏）経文を読みつつ、裏の恋人の生前の詞章をあれこれと回想する気持は堪えがたいものだった。それによって、生前の様々な恋人との逢瀬の場面・姿態がしのばれるものの、今の彼女にとって、裏よりじみ出る筆跡はいつそのこと消えてしまってくれ！と切なく胸を押える。愛する者の、我より早く逝った人への哀惜の情はこの一首に見事に凝結している。

233 寝きえし跡は野原となりはててありしにも似ず荒れはてにけ

北山の絶景地に寶盛の旧領がある。春桜・秋月に二人は度々この地に立寄った。想い出深い故地も、今はある位の所有になっているが、一日、筆者はひそかにこの地を訪ねる。

この歌の詞書きは、「浅茅が原、蓬が袖、薺、菖、小菰、藤袴、一むら蒔、虫の音、妻戸……」などをちりばめ、そこへ下り立っただけで、恋しい人の面影が浮んできて悲嘆にくれるといった王朝物語風の美文である。

野末の尾花が露とあの人の生命が消え失せたあとは、人手も加わず原野と化し、草茫茫たる荒野と見まがうばかり。あの方の生前の別荘の美麗さはその面影さえもない。

一首中に、「あと、ありし」の頭韻、「はてて、はてにけり」の羅列音もあって、生前の雅びの土地の荒涼さが胸に迫ってくる。

235 植ゑて見し人は離れぬる後になほ残る梢を見るも露けし

その離れの東庭に、柳や桜の同じ高さのを交ぜ合わせ風流に植えた。二人も協力して土盛りなどしたが、それは見事な景物であった。今は、あの人は遠く世を去り、あとに残る桜柳の梢を一人つくねんと仰ぎ見るのはまことにさびしい。「植う・見る・離る・残る・見る」と動詞の多用は、生前より死後へと回想のセコンドを刻む思いがして、そうした疊語表現をまとめて受ける「露けし」の句止めを感慨深いものに染め上げている。

237 またさらに憂き故郷をかへり見て心とどむることもはかなしある年の秋、寶盛の旧邸のあとを通りかかり、車から降りてたずんで見た。そこは、礎石のみ目につき、秋の草花咲き乱れ、露のこぼれの中に虫の音がとりどりに聞える風情である。

なつかしい人のかつての住居跡も、今この地に立てば空しく残る礎石だけで、故人をしのんであれこれ追想することも詮ないことである。

右京大夫も何時か二十代の終りに達していた。寶盛の古き里居に立って、諸行無常の感に彼女を深く包んだであらう。彼女の心も感嘆・悲愁の想いに重く沈むのであった。

一、^{みそじ}急
三十路の断想

244 都をば厭ひてもまた名残あるをましてと物を思ひ出でつる語法に注意したい。「……また……を」「まして……を……つる」。典型的な断想法で、句止めの運体止めも余情を深めている。

愛人との死別、政權の崩壊……つくづくと都の暮しがいやになった。それでも、都よりの出立は襟袂の引かれる思い。まして（この語の余韻は秀逸）物を（醜化法の効果よし）と、寶盛の、都落ちに西下する時の心境はいかばかりであったらうと、夢のように過ぎ去った一・二年の才月を回顧する。離別に生別（その当座は）

の二重イメージをダブらせ、「名残・想起」の心象の融合も心憎い秀歌といえよう。

251 月をこそ眺めなれしか星の夜の深き哀れを今宵知りぬる

「こそ……しか」の結びの逆接用法の余韻もよい。下句の、「星夜―深夜―今宵」と続く重層表現もすばらしく、句止めの連体止めも残響がある。

詞書きによると、師走、雪模様の夜、深夜、銀河を見上げると、意外なほど暗れていた。その暗夜の新鮮な感激を詠歌した。

月夜は、飽くことなく眺めているが、一面、銀河浮ぶ暗夜の筆舌を絶した興趣をはじめて体験したという。新村出氏が、銀河賛美の古今無双の美文とたたえられたのもうなづける。

そのさえわたる銀漢のシルエットに亡き資盛との逢瀬の日々の回想をダブらせているのは言うを待たまい。三十路に入り「さだ過ぎ」の筆者の断簡に、悲恋をかこつ人々の吊鐘を聴く思いがする一首である。

252 恋ひ忍ぶ人にあふみの海ならば荒き波にも立ち交らまし

薄明のころ、湖岸の足を都にたどる。対岸は空と溶け合い、薄墨色の虚空を一そうの小船が水脈を残して姿を消していく。またとに、荒涼の一語に尽きる景色だ。

歌中、第二句「人にあふみ」が、資盛に逢ふ身と近江の戀詞で

あることはいうまでもない。この海（湖）が、次第に遠のいていく資盛様に逢うという意を蔵しているなら、たとえ波騒ぐ湖底に没してもこの地に住みつくのだから……。

一見、単純な詠法だが、「……ならば……まし」の仮想語法によるリズム感もよく、荒々しく奔放なタッチが西海に沈んだ人への鎮魂歌の歌がらに高めているといえる。

261 憂きことのいつも添ふ身は何としも思ひあへども涙落ちけり
資盛様との逢瀬は、ほんの数年で終った。それも政変という運命の激変に誘発されたあきらめきれない非情なもので、その憂いは四六時中、身体から離れなかった、その悲しみは、何でもない人との会話や自然の探賞の中でも不意にやってきた。「思ひ敢ふ」（深く物を考えこむ、了察しきる）といった深刻な思考を経ないでも、涙はいつも涙腺に蓄えられて、ほうだと流れ落ちた。ここには、恒常化した現世への背離・背反が渦巻いている。その「確たるものを失った」所より来る虚脱感・欠落感は、一種の想念にまで深められていた。句止めの「……落ちけり」という詠嘆は、彼女の底深い魂へのモノローグとして把握したい。

262 いかにかせむわが後の世はさてもなほ昔の今日をとふ人もがな
文治元年、平資盛他界。二年後、その命日、三月二十日に筆者はたった一人の法要をした。

一体どうしたらよからう、私の死後、私の菩提を弔ってくれる人はいそうもない。しかし、それはそれでいい。私の死後、あの資盛様の法要をどなたがされよう。せめて、この命日だけの供養を続けたいものだが……。

「いかにせむ」の嘆かいが、「さてもなほ」の放任形、「人もがな」の願望・模索形へと響き合っている。「昔の今日」は、熟しない表現ともいえようが、故人の亡くなった今日（命日）の回向の意で、その仏事の持統への筆者の切迫した感情を見事に表現している。史上稀に見る激動期に生きた筆者にとって、三十路に入ったわが身の認識はかくも老成した、危惧感に満ちた心境であつたろう。それは、茲後半世紀近い不本意な生をたどることになる右京大夫のノクターンでもあつた。

二、四十路の感懐

まず、はじめの二首は、篇中、彼女が七夕の歌として列挙している五十首ほどから中期の秀作を引いてみた。

302 棚機³⁰²の契り歎きし身の果ては逢瀬をよそに聞きわたりつつ
修辞として、「契り歎きし」と「逢瀬をよそに」の対照、「身の果は」と「聞きわたりつつ」の照応が心憎い。以前、資盛との交際が傍目も羨むほど繁かつたころ、七夕の夜の牽牛・織女の一年ごとの契りを、「まあお気の毒に、よくも我慢できたこと……」

と同情・嗟嘆していたのだが、なんとそうした平家の文武拔群の貴公子との愛は夢よりもはかなく消失、その身の果は、年ごとの二星の逢瀬を眺めても、それをわが身に無縁のこととして人のうわさを聞き過す身となつたという。

順境から逆境へ。歡喜の絶頂より落莫の奈落へと、一生に人生の両相を見た筆者の中年の深い嘆かいがこの一首に色濃く漂っている。

319 類ひなき歎きに沈む人ぞとてこの言の葉を星や忌まはむ

この歌の衷意に次の歌を対置したらどうだろう。「逢ひに逢ひてまだ睦言も尽きじ夜にうたて明け行く天の戸ぞうき。(298)の歌」。はっと胸打たれる官能美の歌である。ここには、王朝期の相愛の男女の、愛の怨嗟が深くこもっている。さて、引用歌にもどる。この女（右京大夫）の人は、平家一門中、世間より最も属目されていた美貌の貴公子——平資盛と結ばれ、自他共にこの世の幸を謳歌した人であつたが、彼女二十九才、恋人わずか二十五才の時、源平の争乱により、男の入水自殺という類いまれな悲嘆に見舞われることになった。その恋人に死別した女性によって、星合の空の数々の賛歌をよまれることは不吉だ、辞退しようとして二星に嫌われはしないかというのである。

そこには、当時の通念として、三十路から四十路への道を歩む

女性の沈淪の調べがある。自己の悲哀にやや遠観しかけ、己の非運を超克しかけた女性の独白として鑑賞するにふさわしい歌である。

322 いまはただ強ひて忘るるいにしへを思ひいでよと澄める月かな

二句切れとみたい。その方が歌意が切迫するからである。寿永の驚天動地の兵乱以来、筆者は生ける骸として生きてきた。御所を去って二十年、あの時二十三才だった私は今……。当時、気軽な立居と華麗な童顔であった、多くの貴公子たち、それが今は一樣に重々しく朝廷の重鎮となっている。資盛様今おわせばとの熱い想いが老いた身を一瞬通り抜けた。そして今、私は後鳥羽帝のもとに再度の宮仕えを志した。この帝は高倉帝（彼女の主人建礼門院の夫）に爪二つで、それだけに二十年の星霜が彼女には耐えがたい断崖に映る。……

今は、無理やりにそうした熱い想いの日々を念頭より遠ざけんとする。だが、今宵も庭にたたずめば月は中天に浮んで、一見、忘却の彼方に沈めた恋しい過去の日々を想い起しなさいと無心に清らに澄みわたっている。

ここには、二律の背反にむせぶ老女の（当時の）到達した忘我の境がある。資盛亡きあとの生を無用の生と判別した筆者の透徹した月明沈思の佳吟としたい。

323 面影もその名もさらば消えもせで聞き見るごとに心まどはす
そのころ、ある裁判の証拠物件調べで、たまたま当時、蔵人頭だった資盛様手書きの文が目に触れた。それは、忘却の塵の中の水晶にも似て彼女に大きな衝撃をもたらした。

かつての恋しい人のイメージ、資盛という名前：それは二十年も前、現世に確かに存在したものであったが、それはそれで、今の世とは無縁なものと思ってきた。人生の不可思議か、その指標は、今も地下の水脈のように生き続け、今度、その名を聞きその筆跡を見るたびに、私の抑圧していた恋情の琴を大きく奏でることだとよむ。

初句より終句へと激しい調子の漸層法をとって、各句末の、「も・ば・で・に・す」の音の重層も、その揺曳する心情の波長の大きさを暗示している。かくして、彼女は、しばらく焦心の一刻を中年期に刻んだのだった。

351 限りありて尽くる命はいかがせむ昔の夢ぞなはたぐひなき
このころの年譜をくると、彼女四十二才の時、源通宗没、四十三才の時、平親宗没。（この二人は当時の顯官で、生前彼女と親交があった）。四十五才の時、式子内親王没……と続く。ついではがら、四十七才の時、俊成九十の賀。四十九才で、「新古今」撰進、五十七才で、建礼門院没、五十九才、承久の乱、七十八才で

「新勅撰集」完成…の記事がある。

歌にもどうう。これを限りと定命が尽きて他界する命ならどうしよう、あきらめもつく。生きて甲斐なき身とあきらめて、空しく生きる老女が、茫茫たる過去の見果てぬ夢を追ひ、妄執に生きる境涯は他に比類のないものではなからうか。「昔の夢」は、色々解釈できようが、多くの知人の死という悲しみを、定命の極みと考えのりこえても、それら他の人の多くの死をのりこえふみこえ、生尽きるまで生き続けねばならぬわが身のさを見極めようとする筆者の心境がこの歌に極めて奥深い人生模索のトーンを与えているように思えてならない。そのことは、集中最後の自詠が、(358歌)「ことの葉のもし世にちらばししのばしき昔の名こそとめまほしけれ」という歌であることと深いかかわりを持つであろう。

晩年、定家より、勅撰集に入集すべき歌の稿本を求められ、それに付す作者名として彼女は、花の二十才当時、建礼門院仕官の当時の女房名―右京大夫のそれを上記の歌の体裁で定家に希望したのである。

昔の夢…昔の名…妄執を(己の意に反して)追い続ける筆者の名残の歌をもって急の編の結びとする。

あとがき

まえがきでは、小論の主旨に沿って、考証対象歌七十首とした

が、執筆段階では更に三十首ほどにしばられている。他歌の考証を踏まえていることは勿論だが、それだけ精細なものになったはずである。序編は、初々しい恋知りそめた時期、歌編は、それが一挙に高揚した甘美な恋の陶醉期、続いて、資盛出陣による悲劇の招来へと続く。更に急編は、中年期に入った筆者の若年時への折々に触れた回想へと進むのだが、資盛への恋の燃焼がわずか数年で終わっただけに、上昇三、下降七といったいびつな展開の考証になっている。その三対七の人生への充足感がそのまま彼女の八十年に及ぶ人生の縮約となっているのである。この小論をステップにして、他日、他のもろもろの情・景に触れた和歌の考証に論究してみたいと思う。

(昭和二十八年三月卒業、岡山県立津山商業高校教諭)
(昭和五十八年十月二十日)